

2023年10月1日 説教「異邦人キリスト者への挨拶」

使徒の働き 15章 22～29節

エルサレム教会の牧師ヤコブの執り成しにより、異邦人の救いをめぐる議論は終結し、一つにまとまりました。異邦人は確かに救われ、聖霊がそこに働いているという決議がされました。

1. 異邦人クリスチャンへ (22～23節)

①アンテオケへの派遣 (22) 「そこで使徒たちと長老たち、また、全教会もともに、彼らの中から人を選んで、パウロとバルナバといっしょにアンテオケに送ることを決議した。」

そこにいた使徒たち、長老たち、全教会の者たちは、一致した結果をアンテオケの教会に伝えることとしました。それにあたり、パウロとバルナバに同行し、実務をする信仰の人を選出することを決議しました。

②ユダとシラス (22) 「選ばれたのは兄弟たちの中の指導者たちで、バルサバと呼ばれるユダおよびシラスであった。」

派遣されることになったのは、エルサレム教会にあって指導者であったバルサバと呼ばれるユダとシラスです。このユダについては、ほとんどわかりませんが、シラスについては、第二コリント 1:19、Iテサロニケ 1:1などにシルワノと記されているのがその人です。

③挨拶 (23) 「彼らはこの人たちに託して、こう書き送った。『兄弟である使徒および長老たちは、アンテオケ、シリア、キリキヤにいる異邦人の兄弟たちに、あいさつ致します。』」

使徒達、長老達、教会の責任者達は、パウロ、バルナバとユダとシラスに挨拶状を預けました。ここからは、手紙の内容になります。

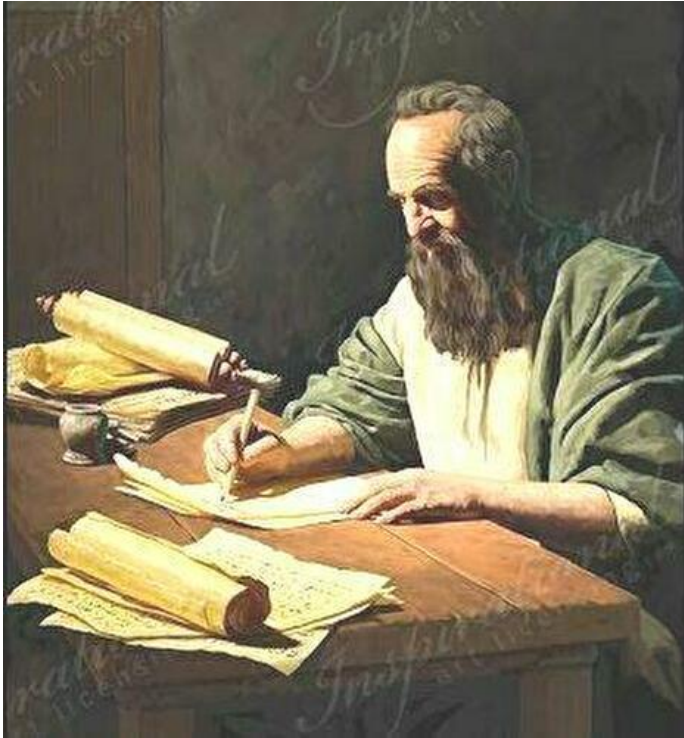
まずは宛名を記します。宣教師の発進基地であるアンテオケ教会の異邦人クリスチャン達と、ガリラヤの北部にあるシリアの異邦人クリスチャン達、また小アジアにさしかかるキリキヤの異邦人クリスチャン達でした。シリアとキリキヤは、アンテオケを首府とする州でした。

2. 異邦人諸教会への挨拶 (24～26節)

①心を乱した事を (24) 「私たちの中のある者たちが、私たちからは何も指示を受けていないのに、いろいろなことを言ってあなたがたを動揺させ、あなたがたの心を乱したことを聞きました。」

挨拶に続く本文です。まずは、エルサレム教会の指示とは関係なしに、ある者たちが勝手な行動をしたことを伝えます。つまり教会に連なるユダヤ人クリスチャンが、勝手に出かけて行って、アンテオケ、シリア、キリキヤ地域の異邦人クリスチャンの方々を動揺させ、心を乱してしまったという事実を認めました。

②人々を送ります (25) 「そこで、私たちは人々を選び、私たちの愛するバルナバおよびパウロといっしょに、あなたがたのところへ送ることに衆議一致しました。」



さらに、教会が会議を開いて、異邦人の救いについての、議決をしたこと、そして、その結果を知らせるために、人々を派遣することも議決したことを伝えます。使徒パウロと使徒バルナバの派遣と共に、ユダとシラスを同行者として派遣することを決めたことも伝えました。

③バルナバとパウロは (26)「このバルナバとパウロは、私たちの主イエス・キリストの御名ために、いのちを投げ出した人たちです。」

エルサレム教会の使徒、長老たちがバルナバとパウロのことを紹介していますが、アンテオケ教会の多くの人達はよくこの二人を知っていました。しかし、宛先にはキリキヤやシリアの異邦人クリスチャン達もいますから、あえてこの二人を、「イエス・キリストの御名のために、いのちを投げ出した人たち」と紹介しています。

3. 重荷を負わせない方針 (27～29 節)

①口頭で伝達 (27)「こういうわけで、私たちはユダとシラスを送りました。彼らは口頭で同じ趣旨のことを伝えるはずです。」

エルサレム教会の文書の手渡しや説明については、パウロやバルナバではなく、ユダやシラスが行うことも伝えてあります。口頭では、異邦人の救いについての見解を伝え、場合によっては、質問にも答えるということでありましょうか。特に異邦人クリスチャンがユダヤ人クリスチャンと差別なく、信じることによって救われ、聖霊の取り扱いを受けることを伝えたのです。

②聖霊と私たち (28)「聖霊と私たちは、次のぜひ必要な事のほかは、あなたがたにその上、どんな重荷も負わせないことを決めました。」

エルサレム教会の使徒達は聖霊降臨の出来事に遭遇し、聖霊に満たされる経験をした人々です。また長老達も聖霊なる神の働きの重要性を認識していました。今ここで、「聖霊と私たちは」とあるのは、ここで伝える内容は聖霊に導かれながら、教会が決議したのだと伝えたのです。その具体的内容は、異邦人クリスチャンに、信じることに加えて、割礼などの重荷を負わせないという決断です。

③注意事項 (29)「すなわち、偶像を供えたものと、血と、絞め殺した物と、不品行とを避けるべきことです。これらのことを注意深く避けていれば、それで結構です。以上。」

ただし、教会としては注意してもらいたい事項も伝えました。それは、異邦人がよくしているように偶像に供えられたものを食べる、血が残った食べ物を食べないこと、レビ記に定められた性的秩序を乱すことなどを避けてもらいたいと加えたのでした。ユダヤ人クリスチャンへの配慮でヤコブが述べた主旨に従ってこれが加えられたのです。

《結論》

「あなたはこの一年間に手紙を書きましたか」という質問に、68%の人が「はい」と答えたとのこと。その内容は、時候の挨拶が最も多く、次に近況報告、投稿、お祝いの挨拶と続いたそうです。うれしかった手紙は？という質問には、自筆のもの、何げない手紙、素敵なデザイン……。私は、仕事上と個人的

な手紙もそれなりに記しますが、ほとんどはパソコンのワープロ書きです。自筆の手紙が好まれることはわかっているのですが、ワープロでは書いた内容を保存できるということも理由のうちです。

さて、今朝の聖書箇所はエルサレム教会で行われた会議に基づく手紙です。アンテオケなどの教会に連なる異邦人クリスチャンに宛てられたものです。それも選ばれた使者が手づから運んだものです。着いた後に、それぞれの教会に文書を渡すとともに、ユダやシラスによってその趣旨が伝えられたと思われます。

手紙の内容について、二つのことを学んでいきたいと思います。

第一に、この手紙が異邦人クリスチャンに対する、細やかな配慮があります。つまり、異邦人である者たちは福音を伝えられて、イエス・キリストを信じるだけで救われると確信していました。そこに、ユダヤ人クリスチャンが来て、割礼や律法遵守などを要求してきました。異邦人クリスチャン者は動揺しました。手紙では、彼らの心情をくみとって、これはエルサレム教会から指示したものでないことを伝えました。その上で、赦しを請うのに近い表現を使っています。また、異邦人クリスチャンにはキリスト信仰に加えて、重荷を負わせないことを決めたことも記しました。手紙には、議論の経緯や内容などは記していませんが、それも配慮の一つであったでしょう。細かなことは、ユダやシラスに委ねたのです。「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和の絆で結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい」(エペソ 4:2-3)とある心を、この手紙の中に表すことを大切にしたいものと考えられます。

第二に、この手紙の末尾にある言葉です。新改訳第二版、三版、口語訳では「以上」と訳されています。最新の 2017 年版では「祝福を祈ります」とあり、新共同訳では「健康を祈ります」、教会共同訳「では、お元気で」とあります。原語を辞書でみると、「手紙の最後の挨拶の言葉」とあります。とするならば、「以上」以外の方が良いと思われます。両共同訳は健康のことが記されていて親しみやすく、新改訳 2017 訳は教会の挨拶らしいです。いずれにせよ、この最後の言葉を通して、受け取った異邦人クリスチャンは慰められ、励まされたと思います。エルサレム教会は遠くにある存在と思っていたのが、より近くに感ぜられるようになったと思われます。そして、自分たちがユダヤ人クリスチャンたちと一つの教会を建て上げていくのだという確信が与えられていったのではと想像できます。今日の教会間、キリスト者同士の手紙の交換も、最後の言葉にまで心を配っていくことが大切だと思われれます。「主にあって」という結びの言葉に感動した人もいます。

主にある交わりにはいろいろな形態があります。ここでは手紙について、見ましたが、手紙はキリスト者の重要な交わりのかたちです。果たして、自らが送っている手紙には十分な配慮があるだろうかと問われます。祈りつつ、手紙を書きたいです。また、手紙を含む、いかなる交わりにも、人を尊敬する心(ローマ 12:10)をもって臨もうではありませんか。